

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：38001

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23094

研究課題名(和文) 琉球多良間方言の学習コンテンツ作成の試み ニーズ調査に基づく

研究課題名(英文) An Attempt to Create Learning Contents of Ryukyu-Tarama Dialect : Based on Needs Survey

研究代表者

小嶋 賀代子(下地賀代子)(KOJIMA-SHIMOJI, Kayoko)

沖縄国際大学・総合文化学部・教授

研究者番号：40586517

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、南琉球・多良間方言の習得に有用な学習コンテンツを作成を試みることであった。研究初年度は多良間島における学習ニーズの調査を実施し、コミュニティメンバーの意識と行動に乖離が見られる、という現状を確認した。また琉球語圏における継承活動の先行事例として沖永良部島の活動を取り上げ、その分析と考察を発表、論文としてまとめた。

だが翌年からはCOVID-19の影響により調査が行えず、研究期間も2回延長した。調査不可の期間は先行研究の収集とその分析等に努め、地域での活用を主眼とした言語学習コンテンツ(「しまことば絵本」)も作成した。絵本は島内の各教育機関へ寄贈し、また刊行イベントも実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、地域での活用を主眼とした言語学習コンテンツ(野原正子、山本史、下地賀代子2021『カンナマルクールの神(カンナマルクールカム)』みる・よむ・きく 南の島ことば絵本 多良間島、ひつじ書房)を作成した。この絵本には本文のほかに「ことばの解説」ページが付されており、単なる読み物としてだけでなく、多良間方言の学習教材として活用することが可能な内容となっている。保育園、幼稚園、小中学校といった島内の各教育機関にも寄贈しており、教育の場での活用が期待される。

また本研究の成果は他の地域にも応用可能なものであり、琉球各地の方言の再活性化に良い影響を与えると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to attempt to create learning content useful for the acquisition of the Tarama dialect of the Southern Ryukyu. In the first year, a survey of learning needs on Tarama was conducted, and it was confirmed that there was a gap between community members' awareness and their actions. I also took up the activities on Okinoerabu as a leading case study of transmission activities in the Ryukyuan language area, and presented and summarized our analysis and discussion of these activities in a paper.

However, due to the impact of COVID-19, the research could not be conducted from the following year, and the research period was extended twice. During the period when the research was not available, I worked on collecting and analyzing previous studies, and also created language learning contents ("Shimakotoba picture books") mainly for local use. The picture books were donated to various educational institutions on the island, and publication events were also held.

研究分野：琉球語学

キーワード：琉球語 琉球多良間方言 言語継承 学習コンテンツ

1. 研究開始当初の背景

奄美大島から与那国島に至る島々の連なりを、一般に「琉球弧」と呼ぶ。そして、この琉球弧で用いられている言語は「琉球語」あるいは「琉球方言」と総称されている(以下単に琉球語)。琉球弧は沖縄本島・久米島と宮古島との間に横たわる約200kmの海域を境に「北琉球」と「南琉球」とに二分される。このうち南琉球には「宮古」、「八重山」の2地域が属する。南琉球の諸方言は首里方言を代表とする北琉球とは大きく異なる言語体系を持っており、その内部差も決して小さくない。また、かつて南琉球諸方言は北琉球諸方言に比べ先行研究の数が少なかったのだが、近年は琉球語全体の記述的研究が活発化しており、南琉球諸方言の研究の蓄積も豊かなものになりつつある。

本研究が主な調査対象とした「多良間方言」は、南琉球諸方言に属する言語である。「多良間」は南琉球の1地域であり、宮古島と石垣島との間に位置する多良間島と、その北方約12kmの水納島とからなる(図1)。これらの島で話されている(話されていた)言語を総称して「多良間方言」と呼んでいる。多良間方言を含む全ての琉球語は消滅の危機に瀕しており、近年はその記録・保存のための記述的研究、また再活性化のための継承活動が各地で盛んに行われている。特に後者について、研究者と地元の話者等が連携して、またはそれぞれ独自に、辞書やテキスト、絵本、カルタ、CD、webサイトといった、方言習得のための様々な学習コンテンツ(紙媒体含む)が作成されてきている。



(※テクノコ白地図イラスト:

https://technocco.jp/n_map/dl/0470/okisakiarea2_bm.pdf より作成)

研究代表者も、多良間村教育委員会発行の方言辞書『つかえる たらまふつ辞典 多良間方言基礎語彙』の編纂(2017年3月)、同たらまふつ副読本『シュダツズマン パイル/育つ島ん栄える』の監修(2019年3月)に携わっている。だが、作成された学習コンテンツが実際どのくらいどのように活用されているのか、また、言語継承という点から見た場合どのくらい有用なものなのか、コンテンツの「その後」についての具体的な検証は、管見に入る限りほとんど行われてきていない。また、その構想段階において、想定される使用者の要望や使用環境などに関する事前の調査や考察は行われているのか、すなわち、方言学習者のニーズに合ったコンテンツとなっているのか。この点についても研究代表者は大きな疑問を感じていた。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は以下の3つであった。

- (1) 多良間における方言教育、方言学習の現状を明らかにする。また、潜在的に方言習得を希望する人、必要とする人がどのくらいいるかを明らかにする。
- (2) 多良間方言の学習者が必要としている言語的スキルとそのレベルを明らかにする。そして、習得のための具体的な学習内容と学習環境の在り方を考察する。
- (3) 上記1、2を踏まえ、効果的な言語学習を実現するための、多良間方言の学習コンテンツ(案)を作成する。

(1)の目的について、初年度に調査自体は行えたものの、フォローアップを含めたさらなる調査を実施することは残念ながらできなかった。そのため(2)の、潜在的な方言学習者の言語的スキルとそのレベルを明らかにする、という調査にも至らなかった。(3)の目的である多良間方言の学習コンテンツの作成については、「作成する」という目的そのものは実現したが、「効果的な言語学習環境を実現する」という観点では疑問の残る結果となってしまった。

3. 研究の方法

本研究は、多良間方言の学習者にとって最も有用な学習コンテンツの作成を目指すものであり、まず学習者の現状、ニーズなどを調査する必要があった。よって研究の前半では、多良間村の教育委員会の協力を得つつ、以下のような事柄に関する調査を行った。だが、2で述べたように、残念ながらその調査は十分なものではない。

A. 方言教育及び方言学習の現状(実施状況、成果等)

- B．非多良間方言話者の、方言学習のニーズ及び学習に対する意識
- C．多良間方言話者の、方言学習及び継承活動に対する意識

また、琉球各地で行われている継承活動について、特に方言教育・方言学習に関わる活動事例の調査を行った。奄美沖永良部島、同与論島、宮古島、八重山石垣島、与那国島などの隣地調査も予定していたが、COVID-19の影響もあり行えなかった。

4．研究成果

研究の初年度である2019年は、多良間島における学習者のニーズを把握するための調査を実施した。約40名の方の協力を得ることができた。フォローアップを含めたさらなる調査が必要であるが、多良間方言の継承の意志を持つ人は少なくないが実具体的活動を起こすまでには至っていないという現状が窺われた。

また、危機言語に関する言説分析と、琉球語圏における継承活動の先行事例として沖永良部島の活動を取り上げ、その分析と考察を発表した。そして同発表を加筆・訂正して論文としてまとめた(「沖永良部島を琉球語継承活動の現状と課題 先行事例の分析を通して」)。

論文について、まず、宮岡・崎山編2002『消滅の危機に瀕した世界の言語 ことばと文化の多様性を守るために』に収められた論考を手掛かりに、危機言語研究および継承活動の必要性、言語学者の役割について考察した。必要性について、いずれの言説も「学問上の重要性」「言語権」の保障「言語に込められた知識の重要性」という3つの観点で共通しており、危機言語の記録及び継承に携わる全ての研究者の共通認識となっていると述べた。研究者の役割については、その知識をもって危機言語の継承を支援する「危機言語のコミュニティに対して継承に肯定的な態度を喚起する」という2点が求められていることを指摘した。さらに言語の継承活動に伴う「困難さ」について考察し、特に琉球語の継承においては、極めて困難ではあるが、その多様性の維持が極めて重要であると述べた。

以上を踏まえ、沖永良部島における継承活動の分析・考察を試みた。同地での継承活動は「うまくいっている」と評価でき、研究者と「鍵となる個人」が協働を契機に活動の連鎖が生じ、継続的なものとなっていることを指摘した。

2020年度は、上記の前年度の成果を踏まえ、ニーズ把握のための多良間島での追加調査、また学習コンテンツの雛形の作成と島の人々への意見聴取の実施を予定していた。だが、新型コロナの影響により断続的に来島自粛要請が出たため、調査実施の目処が立たなくなってしまった。そこで、当該年度においては、言語習得に関する先行研究の収集とその分析、また学習コンテンツの前提となる多良間島方言の文法記述の精密化に努めた。後者については、国立国語研究所主催のシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 日本の言語・方言の対照研究を中心に」(2021年3月6日・21日、オンライン開催)において、「宮古諸方言の形容詞「語根」の用法」というタイトルで形容詞についての報告を行った。

2021年度についても、新型コロナの影響によって臨地調査の実施が極めて難しい状況が続いたため、前年度に引き続き先行研究の収集と分析を行ったほか、地域での活用を主眼とした言語学習コンテンツ(野原正子、山本史、下地賀代子2021『カンナマルクールの神(カンナマルクールのぬかみ)』みる・よむ・きく 南の島ことば絵本 多良間島、ひつじ書房))を作成した。同年度3月には多良間島への来訪もかない、作成した絵本を、保育園、幼稚園、小中学校といった島内の各教育機関へ寄贈した。また合わせて、多良間村教育委員会および同村立幼稚園の先生方と新たな学習コンテンツに関する打ち合わせを行うことができた。

2022年度は、ジュンク堂那覇店において、前年度に本研究で作成した言語学習コンテンツを含む、4冊の「島ことば絵本」の刊行イベントを実施した(みる・よむ・きく・えがく 4つの島のことばの絵本展、2022年7月11日(月)~8月10日(水))。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 下地賀代子	4. 巻 24(2)
2. 論文標題 琉球語継承活動の現状と課題 先行事例の分析を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖縄国際大学日本語日本文学研究	6. 最初と最後の頁 126 - 98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 下地賀代子
2. 発表標題 宮古諸方言の形容詞「語根」の用法
3. 学会等名 NINJALシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 日本の言語・方言の対照研究を中心に」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下地賀代子
2. 発表標題 タラマフツ学習コンテンツ作成に向けて プロローグ
3. 学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 野原正子、山本史、下地賀代子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 33
3. 書名 『カンナマルクールの神（カンナマルクールのぬ カム）』みる・よむ・きく 南の島ことば絵本－多良間島－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------